

北九州市立大学

外国語学部紀要

第 155 号

2022年12月

目 次

【研究ノート】

教育の場における国際的な取り組みへのコミットメントを通じたジェンダー
平等（SDG5）推進の試み

… 齊 藤 園 子 … 57

北九州市立大学

BULLETIN

FACULTY OF FOREIGN STUDIES
THE UNIVERSITY OF KITAKYUSHU

No. 155

December 2022

CONTENTS

〈Research Notes〉

Promoting Gender Equality (SDG 5) Through Commitment to International
Educational Programmes

… Sonoko Saito … 57

THE UNIVERSITY OF KITAKYUSHU

Kitakyushu, Japan

教育の場における国際的な取り組みへの コミットメントを通じた ジェンダー平等（SDG5）推進の試み

齊藤園子

北九州市は「SDGs未来都市」として持続可能な開発目標（SDGs）に関わる取り組みを推進している。北九州市立大学においても様々な取り組みが進められているところである。その中で筆者の研究グループでは、2021年度から、学長選考型研究費A（企画型研究）により、持続可能な開発目標（SDGs: Sustainable Development Goals）のうち、特に目標5「ジェンダー平等を実現しよう（Gender Equality）」に焦点をあてるプロジェクトを進めてきた¹。国際的な取り組みを視野に入れてジェンダー平等の推進を図る試みで、学生と連携して推進している²。

SDGsは2015年9月25日にニューヨークの国連本部における第70回国連総会において採択された国際目標である。ミレニアム開発目標（MDGs：Millennium Development Goals）の後継にあたり、17の目標と169のターゲットからなる「人間、地球及び繁栄のための行動計画」である（国際連合広報センター）。この時の国連決議文書の前文は次の文章から始められ

¹ 2021-2022年度学長選考型研究費A（企画型研究）「国際的な取り組みへのコミットメントを通じた本学におけるジェンダー平等（SDG5）の推進」（研究代表者：齊藤園子）

² 当該プロジェクトは、2021年度からの2か年にわたる助成により、長期的な視野で計画を立て、取り組みを推進することが可能になっている。

教育の場における国際的な取り組みへのコミットメントを通じた
ジェンダー平等 (SDG5) 推進の試み

ている。

This Agenda is a plan of action for people, planet and prosperity. It also seeks to strengthen universal peace in larger freedom. (A/RES/70/1)

究極的には「普遍的な平和の強化」を意図する「行動計画」なのである。この時の国連決議文書の前文では、すべての国およびすべてのステークホルダーのパートナーシップのもとで「持続的かつレジリエントな」世界を構築するにあたり「誰一人取り残さない (no one will be left behind)」ことが誓われている。さらに前文の第三段落では次のように述べられている。

They [The 17 SDGs and 169 targets] seek to realize the human rights of all and to achieve gender equality and the empowerment of all women and girls. They are integrated and indivisible and balance the three dimensions of sustainable development: the economic, social and environmental. (A/RES/70/1)

SDGsが「すべての人々の人権保護を実現し、ジェンダー平等とすべての女性と女児のエンパワーメント」の達成を目指すものであることがすでに前文から明示されていることになる。その上で、「ジェンダー平等を実現し、あらゆる女性をエンパワーする (Achieve gender equality and empower all women and girls)」という「ジェンダー平等」の目標が第5目標として掲げられているのである。「ジェンダー平等」という言葉自体、以前はあまり耳にすることがなかった言葉ではないだろうか。「ジェンダー平等」が世界

共通の目標として掲げられたことの意義は大きい³。また17目標と169のターゲットが「統合され不可分のもの (integrated and indivisible)」であると明示されている点も重要である。各目標の達成には他の目標の達成が不可分に関係することが確認されているのである。SDG5についても、ジェンダー平等の達成と他のSDGsの達成が不可分の関係にあることが確認されていることになる。SDG5の達成が後回しにできない喫緊の課題であるという認識が示されていると見ることもできるだろう⁴。

ジェンダー平等に向けた意識は日本でも高まりつつあると言える。世界経済フォーラム (World Economic Forum) によるジェンダーギャップ指数のランキングにおいて、日本の順位が低迷していることもその意識の向上に貢献しているように思われる。世界経済フォーラムによるジェンダーギャップ・レポート (Gender Gap Report) は2006年以来毎年発表されており、国際社会における各国のジェンダー平等 (特に男女格差) の現状を

³ ただし「ジェンダー平等」という用語のあいまいさを指摘する議論があることには留意が必要である。「ジェンダー」は英語 (gender) の片仮名表記であり、言語横断的に行う語の定義はそもそも容易ではない。また “gender” は一般に、生物学的な性差を表す語 “sex” と対比して、社会的、文化的な性差を表す語とされるが、この性差の捉え方自体にも議論がある。さらに二項対立ではなく、性の多様性の観点から「ジェンダー」を捉える視座が求められてもいる。男女平等の議論の枠内では、近藤弘によれば「男女共同参画」の英訳として “gender equality” があり、それをさらに日本語に訳しなおしたものが「ジェンダー平等」だという (105)。「男女共同参画」という言葉自体についても「男女平等」と明示すべきところで「男女共同参画」が用いられているとの議論もある (『女性学入門』31頁)。また最近では「ダイバーシティ」といった言葉もよく耳にするようになってきているが、「男女平等」を「ダイバーシティ」という言葉で置き換えることの妥当性についても議論がある (『女性活躍はもう古いのか?』)。別の観点からは、一言でジェンダー平等、あるいは男女平等と言っても、この問題に対する際には、複数のアイデンティティの交差を考慮する必要がある。例えば一般に女性学は、白人で中産階級の女性の問題を対象にしてきたとの批判も根強いという (『女性学入門』7頁)。ベル・フックスの「黒人や有色の女性たち」(57) に関わる指摘や、フェミニズムとポルトコロンIAL理論を横断するガヤトリ・スピヴァクの問い、「サバルタンは語ることができるか?」に関わる議論もこの問題の複雑さを象徴する問いだと言える。

⁴ 他のSDGsと比べて「ジェンダー平等」という目標の「優先順位が非常に低い」との論客による指摘がある。(プレッケン、木村など)

教育の場における国際的な取り組みへのコミットメントを通じた
ジェンダー平等 (SDG5) 推進の試み

知るための分かりやすい指標となっている。報告書には経済、教育、健康、政治という4分野と、その総合スコアが示されている。総合スコアで日本は、2021年3月の報告書では156か国中120位、直近の2022年7月には146か国中116位に位置づけられた。日本のジェンダー平等の状況は低迷していると言える状況である。2021年3月の結果を受けた内閣府男女共同参画局総務課による記事では「各国がジェンダー平等に向けた努力を加速している中で、日本が遅れを取っていること」を示す結果であるとの見解が示されている(8)。日本の現状が変わっていないというよりも、他国と比べて日本のジェンダー平等に向けた取り組みの進展が遅いことを反映する結果であるということになるだろう。

こうした根強いジェンダーギャップの根底にはジェンダーに紐づけられた固定観念や役割意識があると考えられる。これらは時間をかけて社会や個人の内部に深く根を下ろしてきたものであって、その転覆は容易ではないように思われる。しかしSDG5の達成が不可欠であるとの認識に基づき、まずはSDGs達成のターゲット年である2030年に向けて有効な対策が講じられることが期待される。ターゲット年の2030年には今の学生の多くが社会の中核を担う位置にある可能性が高いことを考えると、SDGsの達成に向けて、現在の学生が持つ役割は大きい。意識の高い学生も多い世代ではあるが、一層多くの若者にジェンダー平等に関わる問題意識が共有されることが望ましい。

これまで筆者の英語圏文学の領域における担当授業では、シャーロット・パーキンス・ギルマン (Charlotte Perkins Gilman, 1860-1935)、ケイト・ショパン (Kate Chopin, 1851-1904)、アリス・ウォーカー (Alice Walker, 1944-) やヴァージニア・ウルフ (Virginia Woolf, 1882-1941) をはじめとした女性作家の作品を読むことによって、女性の視点から語られる世界に触れる機会を設けてきた。また最近ではジェンダー平等に関わる映像作

品が話題となることも多いため、そうした映像作品も適宜取り上げている。その中には、米国で活躍した女性最高裁判事ルース・ベイダー・ギンズバーグ (Ruth Bader Ginsburg, 1933 -2020) を扱った2018年制作のドキュメンタリー映画『RBG——最強の85才』(原題: *RBG*) や実話をもとにした映画『ビリーブ——未来への大逆転』(原題: *On the Basis of Sex*)、あるいは19世紀末から20世紀初頭にかけて女性参政権運動を急進的に展開した英国の団体の活動に関わる実話をもとにした2015年制作の映画『未来を花束にして』(原題: *Suffragette*) などがある。英語圏以外では、韓国の同名のベストセラー小説の映画化作品『82年生まれ、キム・ジヨン』(2019年制作) を視聴した後に、本学の協定校の一つ、韓国海洋大学の大学生とオンラインによる意見交換の場を設けたことがある。

こうした文学作品や映像作品も示すように、ジェンダー平等に向けた努力は人類の歴史において険しい道を歩んできた。文学作品や映像作品に触れることにも大きな意味があるが、加えてより实际的に、学生が国内外の人材とつながり、国内外の歴史的事実や現状、取り組みや努力、あるいは経験を共有し、協働して達成の方法を考究する場所を提供することができれば、教育の場がジェンダー平等の達成に向けた長年にわたる努力に与して、未来に前向きな影響を及ぼす可能性が広がるものと思われる。

国際的な取り組みのうち、筆者が実践的な教育的取り組みの一つとして関わってきたものに模擬国連 (Model United Nations) がある。模擬国連で学生は、国際施策を国内外の学生と議論することになる。模擬国連活動の意義については、教育の場がグローバルな平和と幸福の構築において果たす役割との関係から、第7代国際連合事務総長コフィ・アナン氏が言及している。アナン氏は1997年にアメリカ教育協会 (American Council on Education) に対して次のように呼びかけている。

教育の場における国際的な取り組みへのコミットメントを通じた
ジェンダー平等 (SDG5) 推進の試み

Although a number of high schools hold model United Nations programmes, very little material on the United Nations is included in formal curricula. Most students enter college without even a rudimentary background knowledge about the United Nations.

Your colleges and universities can fill the gap. Your institutions can cultivate in young people an understanding of the United Nations—of its functions, potential and limits and its direct impact on their lives and futures—upon which its continued service to humanity can be built. The interest and support of your students, the leaders of tomorrow, are critical to the future of the United Nations, which is critical to the future of the world. (SG/SM/6165)

アナン氏は「グローバルな平和と幸福」に対して、世界の将来を担う学生を育てる教育の場が果たす役割の重要性を強調している。その際、将来を担う若者が国連——国連の機能、潜在力、限界、そして人の生活や将来に及ぼす直接の影響力——を理解することが人類の未来にとって不可欠であるとの見解を示している。若者が国連の現状を理解することが国連の未来の保障にとって不可欠であり、国連の未来が保障されることは、世界の未来が保障されることに結びつくというものである。アナン氏は、高等教育機関が若者が国連を理解する手助けをする役割を果たすことに期待を示しているのであり、模擬国連はその可能性を持った教育的な試みの一つとして言及されている。日本の模擬国連については、元国連難民高等弁務官の緒方貞子氏が普及に寄与した人物として知られる。模擬国連が、日本の若者の国際関係やグローバルな問題に対する理解を促進するとともに、国際的な舞台上で活躍する日本の人材の育成に寄与する場となることを期待して

のことであるという（神戸NEXT）。

実際に模擬国連は、学生が国連の役割を学び、また国際問題を理解しながら国内外からの参加者と議論することができる貴重な機会になっている。ジェンダー平等の関係では、国内大会の一つ、日本大学英語模擬国連（JUEMUN）という年次大会において、SDG5がこれまで2回（2017年度、2020年度）、議題として取り上げられた。筆者の参加グループでは関係領域において地域で活躍してこられた人材から情報共有していただく機会を取り入れながら大会への準備活動を進めた。大会中は、学生が当事者感をもって熱心に議論に参加する様子が見られた。この模擬国連の機会は、学内外、国内外の様々な人材と協働したことで、それまでは話題に取り上げにくい印象があったジェンダー問題についても、率直に議論をすることが可能であること、またそれが不可欠であることを実感する機会になった。世界各地がジェンダーに関わる様々な問題を抱えていること、そしてその解決に向けて世界各地の人材が様々な境界を越えて連携することが可能であることを、実践を通じて体験させてくれる場所になった。教員アドバイザーとして参加した筆者にとっても、そのような議論の場を拓くことの重要性を認識するとともに、それまで十分にこの問題に向き合ってきたかどうかを顧みる機会になった。模擬国連のような、学生が主体的にSDGs達成の方法を案出する機会を創出することは、SDG5の達成に向けて教育の場が果たすことができる寄与のひとつであると思われる。若者同士が協働して実行可能な方策を考究する場には、実際に国内外のジェンダー平等実現の加速に寄与する革新的なアイデアが生まれる可能性が認められる。そしてさらにその経験自体が、若者自身のキャリア形成において意義のあるステップになるものと思われる。

「マンスプレイング（Mansplaining）」という言葉の流行に一役買ったことでも知られる作家レベッカ・ソルニットは、多くの女性の、いくつに

教育の場における国際的な取り組みへのコミットメントを通じた
ジェンダー平等 (SDG5) 推進の試み

なっても「ものを知らない娘」(ハーン小路 199) の扱いを受けるとい
う日々の経験を、女性を対象とした暴力や殺人といったより深刻な社会問題
へと接続している。そしてソルニット自身は「人間らしく生きるための戦い」
を戦っているとし、次のように述べている。

Most women fight wars on two fronts, one for whatever the putative
topic is and one simply for the right to speak, to have ideas, to be
acknowledged to be in possession of facts and truths, to have value, to
be a human being. Things have gotten better, but this war won't end in
my lifetime. I'm still fighting it, for myself certainly, but for all those
younger women who have something to say, in the hope that they will
get to say it. (9-10)

後半部分は「かつてよりだいぶましになったが、私が生きているうちにこ
の戦いが終わることはないだろう。私もまだ戦っている。もちろん自分の
ために。そしてなにか言いたいことがあって、実際にそれが言える日が来
ることを願っているすべての若い女性のために。」(18-19頁) と訳されてい
る。ジェンダー平等への努力は終わりのない「戦い」なのだろうか。しか
し終わりは見えなくとも、現状が先駆者の歩みの結晶であることもまた事
実である。教育の場は世代や空間を超えて様々なレベルで連携を創出す
ることが可能な場である。人類は、人がみな、既存のジェンダーの範疇によ
って抑圧されることなく、人間らしく生きることができる社会の実現向け
て歩み続けてきた。教育の場は、その努力に与し、多分に貢献することが
可能な場所であるはずである。

Works Cited

- “Education Key to Global Peace, Well-Being, Says Secretary-General in Address to American Council on Education.” *Press Release SG/SM/6165. United Nations: Meetings Coverage and Press Releases. United Nations*, 24 Feb. 1997, press.un.org/en/1997/19970224.sgsm6165.html
- “Global Gender Gap Report 2021.” *World Economic Forum*, 30 March, 2021, www.weforum.org/reports/global-gender-gap-report-2021.
- “Global Gender Gap Report 2022.” *World Economic Forum*, 13 July, 2022, www.weforum.org/reports/global-gender-gap-report-2022.
- hooks, bell. *Feminism is For Everybody*. Pluto P, 2000. (ベル・フックス『フェミニズムはみんなのもの——情熱の政治学』堀田碧、新水社、2003年。)
- Solnit, Rebecca. *Men Explain Things to Me*. Haymarket Books, 2014. (レベッカ・ソルニット『説教したがる男たち』ハーン小路恭子訳、左右社、2018年。)
- United Nations General Assembly Resolution 70/1, *Transforming Our World: The 2030 Agenda for Sustainable Development*, A/RES/70/1 (21 October 2015), www.un.org/en/development/desa/population/migration/generalassembly/docs/globalcompact/A_RES_70_1_E.pdf. (外務省仮訳「われわれの世界を変革する：持続可能な開発のための2030アジェンダ」www.mofa.go.jp/mofaj/files/000101402.pdf)
- 天野夏海「女性活躍はもう古いのか？『男女均等をダイバーシティに置き換えるのはごまかし』【上野千鶴子・浜田敬子・石井リナ・秋田夏実】」*Woman type*、2019年11月27日、woman-type.jp/wt/feature/15817.
- 勝浦美香・小西隆久「模擬国連、熱く 緒方貞子さんも激励 神戸」『神戸新聞NEXT』神戸新聞社、2016年11月23日。
- 木村充慶「『SDGs、ジェンダーも入れとこう』でいいの？上野千鶴子さんの直言——『家事も労働』に主婦が猛反発した理由」*withnews*、2021年2月2日、

教育の場における国際的な取り組みへのコミットメントを通じた
ジェンダー平等（SDG5）推進の試み

withnews.jp/article/f0210202002qq0000000000000000W0dy10101qq000022437A.

国際連合広報センター「持続可能な開発目標（SDGs）とは」www.unic.or.jp/activities/economic_social_development/sustainable_development/2030agenda.

近藤弘「男女共同参画社会とはどのような社会か——『男女共同参画社会基本法』制定10年を迎えて——」『立教大学ジェンダーフォーラム年報』第11巻、2009年、99-110頁。

杉本貴代栄編著『女性学入門 [改訂版] ——ジェンダーで社会と人生を考える——』ミネルヴァ書房、2018年。

スピヴァク、ガヤトリ・C『サバルタンは語ることができるか』上村忠男訳、みすず書房、1998年。

内閣府男女共同参画局総務課「世界経済フォーラムが『ジェンダー・ギャップ指数2021』を公表」『共同参画』第144号、内閣府、2021年5月、8頁。

ハーン小路恭子「訳者あとがき」『説教したがる男たち』レベッカ・ソルニット、ハーン小路恭子訳、左右社、2018年、197-205頁。

ブレッケン、デイビッド「日本では未だに曖昧な、『ジェンダー平等』という概念」田崎亮子訳、*Campaign Japan*、2019年3月6日、www.campaignjapan.com/article/450283.